

ブダク写本に収められる諸讃歌について

津 田 明 雅

1. ブダク本

ブダク写本はカンギュルの1本として知られるが、周知のように、その中には通常テンギュルに収められる「讃頌部」の諸讃歌が収められる¹⁾。ただしブダク本はテンギュル諸本の讃頌部すべてを含むわけではなく、例えば北京版では讃頌部に63書 (nos.2001-2063, うち注釈が9本) あるのに対し、ブダク本ではわずかに12讃歌 (nos.240-251) である。しかしながらブダク本はNāgārjunaに帰せられるCatuṣṭavaを構成する4讃歌やDharmadhātustavaといった重要なものを含み、またこれら12讃歌はブダク本中の別の場所 (nos.390-401) にも重複して収められる。

ブダク本は「独立系」といわれ、現存の他本にはない独自の読みを示すことがしばしばあり、これまでも重要視されてきた。Harrison氏が“rather carelessly copied”と述べるように全般的にブダク本には筆写の誤りが多いが、他本にはない正しい読みを示すことも多く、校訂には不可欠な貴重な写本といえる²⁾。

これまで讃歌の校訂研究でブダク本を用いたのは後述のHahn, M. (1988) のみである。かつて筆者はNāgārjunaの諸讃歌をテンギュルの5つの写本版本を用いて校訂したが³⁾、それらをブダク本と比較し、特筆すべき点に触れたい。

ここで用いたブダク本とテンギュル5本の成立時期を示せば、ブダク写本 (F) 1696-1706年、北京版 (P) 1724年、金写本 (S) 1733-1740年、デルゲ版 (D) 1737-1744年、サルタン版 (N) 1741-1742年、チヨネ版 (C) 1753-1773年である⁴⁾。テンギュル5本は大きく2つの系統 (P, S, NとD, C) に分かれることが明らかになっているが⁵⁾、奇妙なことに讃頌部はDとCの系統が異なるという報告がなされている⁶⁾。ブダク本とこれら諸本との関わりについても検討したい。

2. ブダク本に収められる讃歌

経、律を中心としながら作者名を冠する讃歌をも含む、というブダク本の構成

は、チベット訳経史上、非常に古い段階での形態をとどめているといえる⁷⁾。デシカルマ目録⁸⁾ (824年成立) ではいまだカンギュル、テンギュルの区別はなく、経、律、論が混在しているが、収録順にみると第19項までが後のカンギュル中心、第20項以降が後のテンギュル中心の構成になっている。ところが諸讃歌は第16項に配列されており、この点がブダク本の構成に類似している。一方、デシカルマに近い時期に作成されたというパンタンマ目録⁹⁾をみると、第17項までがカンギュル、第18項以降がテンギュルに相当する構成となっており、デシカルマと類似している。ところが第16項に讃歌が配列されるところまではデシカルマと一致するが、そこに配属される讃歌はわずかに3つ (nos.424, 425, 431) である。残りの讃歌は後のテンギュルに相当する第25項におかれており、それらは「論」として分類された様子がうかがえる。これを受けてリクレル目録 (1270年前後に成立) および『プトゥン仏教史』目録部 (1322年成立) やそのテンギュル目録 (1362年成立) でも、讃歌は「論」として分類されていく¹⁰⁾。デシカルマとパンタンマの成立の前後関係は未解明であるが、パンタンマの方がカンギュルとテンギュルを分けるという意図がより強くあった様子が、特に讃歌の配列からうかがえる。

カンギュルとテンギュルを分かち流れとして、パンタンマ、『プトゥン仏教史』目録部、プトゥンのテンギュル目録、現在の大蔵経という展開が考えられるが¹¹⁾、ブダク本はその流れから外れ、むしろデシカルマの伝承を示すものとなっている。ただしデシカルマ記載の典籍とブダク本収録の典籍は一致しないものも多く、戒律部と秘密部の場所も異なるため、直接的な影響関係にあったとは考えにくく、今後は中間に介在したであろう要素の検討が必要であろう。

Samten氏はいくつかの要素を挙げ、カンギュルの初期のものには讃歌が収められていたと推測する¹²⁾。しかしながら、すでにパンタンマの時点で讃歌をテンギュルに分類する動きがみられるのであるから、必ずしもそうとは言いきれず、讃歌の有無で2系統のカンギュルの伝承があったのか、あるいはブダク本は例外的な形態にすぎないのか¹³⁾、さらなる検証が必要であろう。

ブダク本所収の12の讃歌のうちNāgārjunaに帰せられるのは、Nirvīkaṣṭava (Nvs), Paramārthastava (Ps), Nircaupamyastava (Ns), Lokāṭistava (Ls), Dharmadhātustava (Dhs), Acintyastava (As), Āryamañjuśrībhaṭṭārakakarunāstotra (Ks) の7つ (nos.240-245, 247 = nos.390-395, 397) である。校訂に際しては便宜上 nos.240-245, 247の読みをFとし、nos.390-395, 397の読みをF'とする。両者はよく類似した

読みをもち、いずれにも明らかな表記ミスと思われるものがいくつかあるが、表記に関してはF'の方が、ダンダの数の不統一や句切り位置の不適当さをはじめ、テキストの欠落、追加まであり、よりずさんである。ただしFよりもF'の読みの方がよい場合がないわけではない。

3. テキストごとの異読

LsとAsにはすでにLindtner氏による校訂本があるが¹⁴⁾、この中にはサンスクリットの読みに合わせて同氏が独自に訂正した読みが存在する。これらのうちいくつか、プダク本の読みが支持されることが判明した¹⁵⁾。また、テンギユルの5本ではLs26とAs23、53はいずれも3句しかないが、プダク本では後2者に關しては4句存在する¹⁶⁾。Ls26は3句でサンスクリットの1偈分に相当しており、もともと3句で訳された可能性も残るが、As23、53はいずれもプダク本の1句が加わってはいじめて1偈分となる。このように、プダク本によって従来問題とされていたサンスクリットとチベット訳との相違¹⁷⁾がいくつかが解消される。

NsとPsに關してはTucci氏による校訂本があるが¹⁸⁾、プダク本による訂正箇所は前者に1箇所¹⁹⁾あるのみである。プダク本の奥書きは両者ともにおいて翻訳者名を記さないという点でテンギユル本と異なるが、訳文が大きく異なるというとはなく、もとは同一の翻訳であるといえる。

Dhsに關しては早島氏による校訂本がある²⁰⁾。プダク本は比較的デルゲ版と一致する読みが多い一方で、独自に正しい読みを示す場合がいくつかある。本讃歌には新出の梵本があり校訂作業が進んでいるようであるが²¹⁾、読みの確定には依然としてチベット訳に依るところが大きく、プダク本の読みは貴重といえる。

Ksに關してはテンギユル本では翻訳者名が記されないのに対し、プダク本ではインンドのPaṇḍita Jarandana (?)とRin chen bzai po (958-1055)の翻訳とされる。訳文は大きく異なることから、もとは同じ翻訳であったと考えられる。作者名はFにはないが、F'にはNāgārjunaとある。

NhsはすでにHahn氏によって校訂されているが、これはF、P、Dを用いたものである²²⁾。本讃歌はテンギユル本、デンカルマ、パンタンマ、プトウンのテンギユル目録では*Prajñāpāramitāstotra*として知られる。一方でAtiśaは*Nirvikalpastava*と呼び²³⁾、『プトウン仏教史』目録には**Prajñāpāramitā-nirvikalpastava*²⁴⁾とある。サンスクリットが各種般若経典(『八千頌般若経』、『二万五千頌般若経』、『善勇猛般若経』)の冒頭に置かれたものとして得られる。テンギユル本の翻訳者はカ

シュミールのThig le bum paとBlo ldan śes rab (1059-1109)であるが、プダク本の翻訳者はインンドのŚāntibhadraとTshul khriims rgyal ba (1011-1064)である。両者で訳文は異なるものの、いずれもサンスクリットとはほぼ一致する。作者はプダク本やテンギユル本ではNāgārjunaとされるが、デンカルマやパンタンマではRāhula-bhadraとされ、すでに先行研究によって後者であることが明らかである。

訳文の異なるNhsを除いて、これら6つの讃歌全体に關して次のようにいえる。FおよびF'の異読と単独で一致する、あるいは類似する読みをもつものにはDとCがあり、その数はDが圧倒的に多く(139箇所)、Cはわずかに7つである。DとCの両者のみがF、F'と一致する例は1つ(Dhs59c)しかない。P、S、NいずれかとF、F'の関連をうかがわせる異読は存在しない。C単独の一致に關しては必ずしもプダク本からの影響とまではいえないものである。したがってプダク本は、テンギユル本ではDとのみ何らかの影響関係にあったといえよう。

上記以外にも多くの重要な異読が存在するが、紙幅の都合で省略する。

4. まとめ

以上の7つの讃歌全体に対していえることは、次の通りである。

FとF'の読みは類似しており、テンギユルの5本とは明らかに異なるものが多い。F'はFよりも表記上の乱れが多く、Fの方がより信頼のける読みをもつ。F、F'とD単独の読み的一致が多くみられ、プダク本とデルゲ版テンギユルは何らかの影響関係にあったといえる。両本の成立年代を考慮するとプダク本あるいはその系統のものがデルゲ版テンギユルの編纂に際し参照されたと推測される。ここで扱った諸讃歌に關してはDがテンギユルの他本よりよい読みをもつ場合が多い²⁵⁾。プダク本はそれらを支持することがあるだけでなく、さらにより読みを示したり失われたテキスト部分が存在するという点で、非常に重要である。諸讃歌を含むプダク写本の構成はデンカルマ目録の伝承を引き継ぐもので、現在の大蔵経が果たして確立していたのか、あるいはプダク本は偶発的な形態にすぎないのか、今後も検討が必要であろう。

1) その他、テンギユルに収められるものでプダク本にあるものは、nos.92, 271, 272, 280, 283, 373, 403, 405である。これらのうちにはカンギユルの他本(Tog palace, Ulan Bator)に収められるものもあり(Santen, J. (1992) *A Catalogue of the Phug-brag Manuscript Kanjur*, Library of Tibetan Works and Archives, Dharamsala, pp.272-286), テンギユルのみに

収められるのは nos.271, 272, 280 (P nos.5330, 5335, 5462) の3本である。特に前2者は Nāgārjuna に帰せられる *Sūtrasamuccaya* と Śāntideva の *Śikṣasamuccaya* であり、今後の校訂研究が俟たれる。

2) Harrison, P. (1992) *Druma-kimara-rāja-pariprcchā-sūtra*, The International Institute for Buddhist Studies, Tokyo, pp.xxii.n45, xxxv.20-24; 佐藤直実 (2008) 『藏漢訳『阿闍世王經』研究』, 山喜房仏書林, 東京, p.77.3. 3) 津田明雅 (2006) 『Catuḥstava とナーガールジュナ』, 博士論文, 京都大学, pp.311-380. 4) F: Samten (1992) p.iv.5-6; P, D, N, C: 御牧克己 (1987) 「チベット語仏典概観」, 『チベットの言語と文化』, 冬樹社, 東京, pp.283.15-284.15; S: 三宅伸一郎 (1997) 「ガンデン寺所蔵金写テンギュルについて」, 『日本西蔵学会々報』, 41-42, p.38.15. 5) Schoening, J. D. (1995) *The Śālistamba Sūtra and Its Indian Commentaries*, 1, Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien, Universität Wien, Wien, pp.132.30-134.15. 6) Eimer, H. (2002) "On the Structure of the Tibetan Kanjur," *The Many Canons of Tibetan Buddhism: PIATS 2000*, Brill, Leiden, etc, p.74.29-33; Schneider, J. (1993) *Der Lobpreis der Vorzüglichkeit des Buddha*, Indica et Tibetica Verlag, Bonn, p.44.10-13. 本稿で扱う諸讃歌に關しても D と C は読みの異なる場合が多い。

7) Samten (1992) p.vi.2-6. 8) Lalou, M. (1953) "Les textes bouddhiques au temps du Roi Khri-sroṅ-lde-bcan," *Journal Asiatique*, 241, pp.313-353.

9) 民族出版社 (2003) *dKar chag 'Phan thān ma / sGra 'byor bam po gñis pa*, 民族出版社, 北京; 川越英真 (2005) 『dKar chag 'Phang thang ma』, 東北インド・チベット研究会, 仙台。

10) リクレル目録とは bCom ldan [rigs pa'i] ral gri による *bsTan pa rgyas pa rgyan gyi ſhi 'od* のこと。デンカルマとパンタンマを参照して 1260 年代末から 1270 年代初め頃著されたという: Schaeffer, K. R. et al. (2009) *An Early Tibetan Survey of Buddhist Literature*, Harvard University Press, Cambridge, etc, pp.51-70. 同目録ではパンタンマの第 16 項相当個所に讃歌が 3, 第 25 項相当個所に讃歌が 55 配置されており, 讃歌の配属はパンタンマと類似している。本目録については加納和雄氏にご教示いただき, また諸論文入手にもご協力いただいた。記して感謝申し上げたい。プトゥンの目録部に関しては, 西岡相秀 (1981) 『『プトゥン仏教史』目録部索引 II』, 『東京大学文学部文化交流研究施設紀要』, 5, pp.64.7-66.15. プトゥンがパンタンマを参照していたことは川越氏によって明らかにされている: 川越英真 (2005b) 『『パンタン目録』の研究』, 『日本西蔵学会々報』, 51, pp.119.14-122.7. プトゥンのテンギュル目録の讃頌部を構成する典籍は, 順序ともに北京版やデルゲ版とよく一致する: 越智淳仁 (1980) 「プトゥンの論疏部目録——1. 礼讃部」, 『高山大学論叢』, 15, pp.53-132. 11) リクレル目録の構成はパンタンマに近いが, 戒律部がのちのテンギュル相当箇所にある点で他と異なる。 12) Samten (1992) pp.v.1-vii.3; Harrison, P. (1994) "In Search of the Source of the Tibetan bKa' 'gyur," *Tibetan Studies: PIATS 1992*, 1, The Institute for Comparative Research in Human Culture, Oslo (*PIATS 1992* と略), p.301.25-44. 13) Samten 氏はブダク本を標準版 (standard edition) とは異なる地方版 (local collection) と呼び, 後者は厳密に編纂されたものではないと考える: Samten, J. (1994) "Notes on the bKa' 'gyur of O-rgyan-gling," *PIATS 1992*, p.398.1-26. Eimer 氏もブダク本を本流 (mainstream tradition) に属さない地方版とする: Eimer (2002) p.57.n1. 一方, Skilling 氏は「カンギュルの standard」という概念への疑問を呈している:

Skilling, P. (1997) "From bKa' 'bstan boos to bKa' 'gyur and bsTan 'gyur," *Transmission of the Tibetan Canon: PIATS 1995*, Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, Wien, pp.100.21-101.12. いわゆる地方版カンギュルには O rgyan gling (Samten (1994)) や Mustang が知られており, 特に後者には讃歌が 1 つ (= F nos.249, 430) 含まれている: Eimer, H. (1999) *The Early Mustang Kanjur Catalogue*, Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien, Universität Wien, Wien, p.20.10-17; Eimer, H. (1994) "Preliminary Notes on Nor chen's Kanjur Catalogue," *PIATS 1992*, p.233.37-40. Mustang にはテンギュル目録も存在し, それによると讃頌部が冒頭に置かれ, 導入文をはさんで般若部等が続く: Eimer (2002) p.85.5-9. したがってパンタンマと同様 Mustang にも, 讃頌部がカンギュルからテンギュルに移された形跡がうかがえるといえよう。また, 現行のテンギュルで諸本の系統が讃頌部と他部とでは異なるという前述の点も, 讃頌部がカンギュルからテンギュルへと移された痕跡といえるのではなからうか。

14) Lindner, Chr. (1982) *Nagarjuniana*, Akademisk Forlag, Copenhagen, pp.121-161. これは P と N を使用。 15) Ls9c: gan FF' Lindner / kyañ PSDNC, A: 9d: gan FF' Lindner / g'zan PSDNC, 14c: mam byan FF' Lindner / rams kyañ PSDNC, 16d: gdon gyis thebs FF' (Lindner) / don gyi theg PSDNC, 19d: de tshe F Lindner / gan tshe F' PSDNC, 29a: la FF' Lindner / las PSDNC, 41a: dam FF' Lindner / dan PSDNC, 47b: bzéd F' Lindner / bzad F / bsad PSDNC. 16) 23d: tshig gi spyod yul ga la lags || FF' / om, PSDNC, 53a: chos kyi mchod sbyin bla (bla na F') med pa || FF' / om, PSDNC. 17) 斎藤明 (1986) 「龍樹作『四讃頌』について」, 『宗教研究』, 267, p.164. 上 20-下 12; 津田 (2006) pp.17.24-28, 18. 18) Tucci, G. (1932) "Two Hymns of the Catuḥstava of Nāgārjuna," *The Journal of the Royal Asiatic Society*, 1932, pp.309-325. これは N のみを使用。 19) Ns23c: kyi F / kyi F' PSDNC. 20) 早島理 (1987) 「『讃法界頌』考」, 『長崎大学教育学部社会科学論叢』, 36, pp.41-90. これは P, D と詳細不明のインド版を使用。 21) Liu, Zh. (2013) "The Dharmadhātustava Found in TAR," *China Tibetology*, 20, pp.12-29. この論稿の PDF を松田和信氏よりお送りいただいた。記して感謝に代えたい。

22) Hahn, M. (1988) "Bemerkungen zu zwei Texten aus dem Phudrag-Kanjur," *Indology and Indo-Tibetology*, Indica et Tibetica Verlag, Bonn, pp.53-80. F nos.240, 250 を扱ったものであるが, 重複訳 (F') の nos.390, 400 は参照していない。 23) *Madhyamakopadeśa* de Nāgārjuna の著作を列挙する中の一つに挙げる: 宮崎泉 (2007) 「『中観慶波提舍開宝頌』テキスト・訳注」, 『京都大学文学部研究紀要』, 46, p.60.6; Brunnhölzl, K. (2007) *In Praise of Dharmadhātū*, Snow Lion Publications, Ithaca, New York, etc, pp.345-346.n18. 24) No. 932: 西岡 (1981) p.65.11-12. 25) 例えば *Dhs* に関して, Liu (2013) p.19.2-5.

〈キーワード〉 ブダク写本, 讃頌部, Nāgārjuna, Catuḥstava, Dharmadhātustava (京都大学大学院修了, 博士 (文学))